

困難克服過程で受けた支えに対する感謝が成人期以降の 時間的展望に及ぼす影響 —世代継承性を育む体験の一つとしての子育てに着目して—

下 満 由 貴* ・ 小 山 憲一郎**

要旨

本研究は、困難克服過程での被援助経験に感謝することが、感謝特性の高まりを介し時間的展望を高めるというモデルを、成人期・中年期を対象に検討したものである。特に世代継承性を育む体験の一つとして子育て経験に着目して分析した。

独自に作成した成人版困難克服過程で受けた支えに対する感謝尺度（GPS13）は、「率直な交流と寛容への感謝」と「存在の受容への感謝」の2因子構造となり、信頼性と妥当性が確認された。140名のデータにて、現在子育て中（子育て群）、かつて子育て経験あり（完了群）、子育て経験なし（未経験群）の3群による多母集団同時分析を実施した。その結果、子育て群では、「率直な交流と寛容への感謝」が「過去受容」に直接負の影響を示したこと、完了群では、被援助経験に対する感謝からのパスが感謝特性に集約されたのち時間的展望の全ての因子に正の影響を及ぼすこと、未経験群でのみ「存在の受容への感謝」が「目標指向性」に直接正の影響を及ぼすことが示された。

特に子育て群と完了群における感謝と時間的展望の関連の相違は、子育ての進展によって感謝の体験が変容した結果、時間的展望の在り方が質的に異なっていく可能性を示していると考えられる。

Keyword：感謝、時間的展望、成人期、世代継承性、子育て

問題と目的

1. 成人期における時間的展望と自我同一性

私たちは、現在において過去を振り返り、未来に思いを馳せながら人生という時間を生きている。人生は、とりわけ親子関係に見られるように、他者の時間と自分の時間が交差し、綿々と積み重なるという点で社会歴史的な性格を帯びた時間でもある（都筑, 2007）。このような過去から現在にかけた“見通しの感覚”が時間的展望であり、「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」（Lewin, 1951 猪股訳, 1961）と定義されている。

時間的展望は、自我同一性の感覚に必要な構成要素の1つである。自我同一性の感覚とは、「自分自身の内部の斉一性と連続性を維持する能力が、他人にとって

その人が持つ意味の斉一性と連続性と調和するという確信」（Erikson, E. H., 1959 西平・中島訳, 2011）である。つまり、過去から未来にかけて一貫して私であるという認識を他者と共有するという点で時間的展望が関与しているのである。

青年期以降、職業選択や家族形成、地域活動と、活動のフィールドは多様性を増していくが、大野（2020）によると、この時期以降、選び取った自我同一性の実践は勿論のこと、そのあり方がさらに転換していく時期でもある。その転換とは、親的存在に愛される受動的な存在から、人を愛する能動的な存在として生きることであり、愛する対象は二者関係を中心とした「親密性」から更に次世代の育成への関心という「世代継承性」へと広がりを増していく（大野, 2020）。つまり、育ま

* 福岡県立大学大学院 心理教育相談室 非常勤相談員

** 相談室委員／福岡県立大学大学院 人間社会学研究科 心理臨床専攻 講師

れた自分を主体としてその能力を発揮するだけでなく、愛する対象を広げながら育む側としての主体となり、その能力を発揮していくという変遷を示していると言える。

上述の発達の変化に伴い、時間的展望もまた変化することが明らかにされている。白井 (1997) によると、成人期は、職業や家族領域における将来展望が広がるため、目標指向性が青年期に比べて高くなり、現在と繋がりのある未来指向（ポジティブな未来志向）が増大する。中年期は、近親者との離別といった関係の変化を機に時間的展望の危機が生じるため、個人の限界や相互依存が意識されやすく、未来と結合した現在指向（ポジティブな現在指向）へと変化する。このように、とりわけ中年期は現在の重要度が高く過去に偏重しない態度が求められる。

2. 成人期における過去展望の感謝

一方、過去を展望する行為である回想は、これまで乗り越えた危機を人生の転機と意味づけ、自己の連続性を作り出す働きを持つとされている（白井, 2010）。また、中年期であっても、過去を土台としてあるいは自己形成における必然性として認知し、現在の生活に活かすことで精神的健康に良い影響を及ぼす可能性を示す知見も存在する（日潟 2007, 2012；日潟・岡本, 2008）。

過去を展望することで生じる感情の一つに感謝がある。心理臨床の領域においては、内観療法が回想を主たる介入として用いており、回想の結果として感謝恩報の念が生じるとされている（吉本, 1983）。また、吉本 (1983) によると、内観三項目の一つである「してもらったこと」は、「迷惑をかけたこと」にも重複し、それはすなわち、他者（とりわけ両親）の恩によって育まれたという、愛情体験の想起に留まらず、受け身で自己中心的な態度に対する負い目の自覚を伴うものである（村瀬, 1996）。このように、当時の相手の立場に立って感情移入する試みによって自分と他者との関係が再構成され、感謝と負い目の自覚が生じ、それらは他の人々や世界へと一般化されることで、安らぎや充足感が生まれ、向社会的行動が動機づけられていく（村瀬, 1993, 1996）。

内観療法において感謝が負債感も含めた複合的な感情として体験されているように、日本人を対象とした感謝研究では、被援助状況における感謝と負債感の共起（吉野・相川, 2018）が確認されている。そして、内観療法に見られる自己中心的態度に対する負い目の

認識から向社会的行動への動機づけという点では、負債感の中でも、借りを介さねばならないという返報義務感を抱きやすい程、借りを返すために他者に積極的に関わっていくことで心理的well-beingが促進されるプロセスが示唆されている（鷺津・内藤, 2016）。

過去展望の感謝という点において、池田 (2006, 2014) は、親に対する感謝の心理状態を検討する尺度を作成し、これまでの親の支えを省みて感謝する項目を含めていた。また、高井 (2001) は存在受容感尺度を作成したが、その中の一部に過去展望の感謝と呼べる項目を含め、それらと生き方態度との関連を検討していた。いずれも重要かつ興味深い研究であるが、これらの研究は、過去展望の感謝を尺度の一部の項目として扱っており、過去展望の感謝の間接的な検討にとどまっている。このように過去展望の感謝を直接かつメインターゲットとして扱った研究は稀有であり、研究を進めていく価値があるものである。

3. 前回の研究における課題と本研究の目的

下満・小山 (2021) は、青年期にあたる大学生を対象に、「支えを受け努力し困難を乗り越えた経験を振り返る」という教示の下、困難克服過程で受けた支えに対する感謝（GPS：Gratitude for Past Support in overcoming difficulty）つまり、過去展望の感謝の中でも被援助経験への感謝を測定する尺度を作成し、時間的展望に及ぼす影響を検討した。その結果、大学生においてはGPSが時間的展望に直接影響を及ぼすモデルの妥当性が高く、時間的展望の下位因子の中でも希望を最も高めることが示された。更に、内観療法による感謝恩報の念の高まりを参考とし、GPSが感謝特性を介して時間的展望に正の影響を与えるというモデル（Figure 1）を作成し、やはり時間的展望に正の影響を与えることを確認した。

一方、先述の都築 (2007) の指摘のように、人生は親子関係をはじめとする歴史の一局面の中で出会う他者との関係の中で形作られる社会歴史的性格を帯びた時間であり、また白井 (1997) が述べたように、成人期には職業や家族領域におけるポジティブな未来志向を強め、中年期には自らや家族の老いとともに離別や死別を身近に経験するなど時間的展望の危機を経験しながらもその統合に努めていく。

このような時間的展望の変遷の中で、大野 (2020) が指摘した「親的存在に愛される受動的な存在」から「人を愛する能動的存在」への転換が成されていると考えられ、子育てにおいては、自分が子どもとして愛

困難克服過程で受けた支えに対する感謝が成人期以降の時間的展望に及ぼす影響

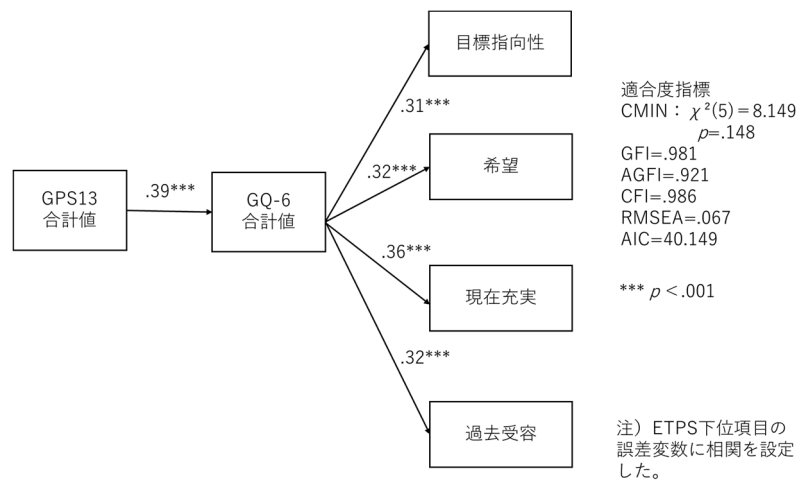


Figure 1 大学生の解析結果（下満・小山，2021）

され、育てられた体験から、自分が親として老いてい
きながらも子どもを愛し、育んでいくのだと考えられ
る。このように、育む側としての主体となるにあつて、
人が愛情体験の想起と、受け身で自己中心的な態
度に対する負い目の自覚を体験し、自らの親やまたは
親の代わりになってくれた人との関係を再構成してい
く（吉本，1983；村瀬，1996）ことも想像に難くない。

これらの観点を踏まえると、成人期以降、人は支え
てくれた側（育む側）の視点を持って、当時の被援助
経験を省みて感謝特性が高まり、時間的展望を形成す
るという一連の流れが想定され、Figure 1のモデルは成
人期以降に適していると考えられる。

さらに、育む側としての主体の形成という点におい
ては、「世代継承性」を育む体験の一つとして、子育て
経験の有無及び進行状況に着目し、Figure 1のモデルの
検討を行う。特に、子育ての進行状況から、被援助経
験に感謝することと感謝特性および時間的展望の関連
の差異を検討することによって、育む側の主体の形成
に伴って生じる感謝体験の変容を検討することができ
ると考えられる。

勿論、子育てのみが世代継承性を育む体験ではなく、
次世代への関心の向け方は、生産性や創造性の発揮、
利他的な関心を向ける等、個々人の事情によりその実
現内容は多岐に渡る（Erikson, E. H., 1959 西平・中
島訳，2011）。本研究では質問紙調査という性格上、具
体的かつ明確な条件として子育て経験の有無を取り上
げ検討する。

方法

1. 対象者と手続き

楽天インサイトに依頼し、2018年4月18日に有償の
Web Researchを実施した。

同日、楽天インサイトにアンケート協力の登録をし
ているものに対し、メールにてWebアンケートのURL
が配信された。

サンプル回収数を200サンプルに設定し、配信・回収
条件は、年齢：25歳～79歳、男女を均等にし、配信地
域を全国とした。また、男女ともに25歳～39歳：20サ
ンプル、40代：20サンプル、50代：20サンプル、60代：
20サンプル、70代：20サンプルとして割り付けた。

(1) フェイスシート

年齢、子育て経験の有無及び現在の状況を尋ねた。
現在子育て中、かつて子育て経験あり、子育て経験な
しの3項目として尋ね、分析においては順番に1, 2,
3としてダミー変数化した。

(2) 質問紙

いずれも先行研究において信頼性および妥当性が確
認されているものである。ただし、下記①の尺度は先
行研究と調査対象の年齢が異なるため、因子分析、信
頼性係数の算出、関連する尺度との相関分析を行い、
並存的妥当性を検討することにした。すべての尺度に
おいて、高得点が表題の心理特性、状態の高さを示し
ている。

- ①困難克服過程で受けた支えに対する感謝（GPS：
Gratitude for Past Support in overcoming difficulty）
下満・小山（2021）が作成したGPSの24項目を使用

した。教示は、「あなたが今まで、支えを受け努力し困難を乗り越えた経験を振り返ったとき、以下の項目に示す経験にどのくらい感謝していますか。」である。「心の中の思いを真剣に聴いてくれた」等の具体的な他者の支えに関する項目から構成されている。回答は、「1：感じなかった（該当しない）」から「5：非常に感じた」の5件法で求めた。

②過去と現在の連続性（TC PP：Time Continuity of Past to Present）

時間的連続性尺度（Time Continuity Scale（石井，2015））の「過去と現在の連続性」の4項目を用いた。「過去があるから今がある」等の項目から構成されている。回答は「1：あてはまらない」から「5：あてはまる」の5件法で求めた。

③感謝特性

感謝特性を測定するためMcCullough, Emmons & Tsang（2002）によって作成された、The Gratitude Questionnaire Six-Item Form（以下、GQ-6）の感謝特性尺度邦訳版（白木・五十嵐，2014）を用いた。利他的な行為を受けた時に感謝を感じやすい程度を測定する尺度で、「私が今までに感謝したことすべてを数えようとしたら、きりがないだろう。」「私の人生には感謝すべきことが多い。」等の5項目から構成されている。回答は「1：全くそうではない」から「7：全くそうだ」の7件法で求めた。

④時間的展望

白井（1997）の時間的展望体験尺度（ETPS：Experimental Time Perspective Scale）を用いた。この尺度は、時間的展望の中でも、過去・現在・未来に対する感情的評価という時間的態度を測定する。「目標指向性」「希望」「現在充実」「過去受容」の4つの下位尺度、計18項目からなる。目標指向性は「私には将来の目標がある」等の5項目、希望は「私には希望がもてる」等の4項目、現在充実は「毎日の生活が充実している」等の5項目、過去受容は「私は自分の過去を受け入れることができる」等の4項目からなる。回答は「1：あてはまらない」から「5：あてはまる」の5件法で求めた。

結果

1. 成人期以降のGPSの因子構造、信頼性および妥当性の検討

困難克服過程で受けた支えに対する感謝尺度（GPS）（下満・小山，2021）は大学生を対象に作成されたものであったため、再度因子構造、信頼性および妥当性の検討を行った。

まず、200名のデータ（男性100名・女性100名・平均年齢54.1±14.2歳）を基に最尤法とプロマックス回転を用いて因子分析を実施した。因子負荷量を参考に、項目の削除を行いつつ、繰り返し因子分析を実施した

Table 1 因子分析結果（N=200）

| | I | II |
|---------------------------------------|------|-----|
| 第Ⅰ因子：「率直な交流と寛容への感謝」 | | |
| 2. 何かのレッテルを貼らずに自分を認めてくれた | .83 | .03 |
| 7. 相手の意見を批判しても受け止めてくれた | .81 | .00 |
| 5. 辛い時でも、互いの意見を素直に表現し合えた | .76 | .14 |
| 13. 欠点や弱さを隠さずに接してくれた | .75 | .17 |
| 11. 失敗と感じる経験をユーモアに捉えてくれた | .74 | .11 |
| 1. 心の中の思いを真剣に聴いてくれた | .70 | .15 |
| 12. 失敗と感じる経験を否定せずにいてくれた | .68 | .22 |
| 3. 間違いをありのままに指摘してくれた | .68 | .03 |
| 第Ⅱ因子：「存在の受容への感謝」 | | |
| 25. 落ち込んで何もできない状態をありのまま受け入れてくれた | -.01 | .92 |
| 26. 打ち明けにくい思いを話せるまで待ってくれた | .03 | .87 |
| 30. 落ち込んでいる理由をあえてきかずにそっと傍にいてくれた | .08 | .77 |
| 24. 「あなたよりもっと辛い人もいるんだよ・・・」と言わずに聴いてくれた | .15 | .75 |
| 29. 心の中に抑えている否定的な感情に共感してくれた | .21 | .67 |
| α 係数 | .93 | .94 |
| 因子間相関 | | .81 |

ところ13項目、2因子構造を採用した（Table 1）。

第1因子は「何かのレッテルを貼らずに自分を認めてくれた」「相手の意見を批判しても受け止めてくれた」「辛い時でも、互いの意見を素直に表現し合えた」「欠点や弱さを隠さずに接してくれた」等の8項目から構成された。それらは、困難な状況で心理的視野狭窄に陥り、否定的態度を取りがちであったにも関わらず、率直に意見を伝え合う交流がなされており、それに対し評価することなく寛容に受け止められたことへの感謝を示す項目が集約されていた。そこで「率直な交流と寛容への感謝」と命名した。

第2因子は「落ち込んで何もできない状態をありのまま受け入れてくれた」「打ち明けにくい思いを話せるまで待ってくれた」「落ち込んでいる理由をあえてきかずにそっと傍にいてくれた」等の5項目から構成された。それらは、困難と感じる状況に圧倒され、閉鎖的な心理状態に陥った私という存在を、ありのまま受け入れてくれたことへの感謝を示す項目が集約されていた。そこで、「存在の受容への感謝」と命名した。第1因子（ $\alpha = .93$ ）、第2因子（ $\alpha = .94$ ）ともに信頼性は充分であることが確認された。以下、成人版の尺度をGPS13と表記する。

次に、並存的妥当性を検討するため、TC「過去と現在の連続性」およびGQ-6との相関分析を行った。その結果、GPS13合計値及び下位因子において、「過去と現在の連続性」およびGQ-6と有意な正の相関を持つことが示された（Table 2）。さらに、相関係数は青年期版の尺度（下満・小山, 2021）に比べ若干高く示された。従って、過去から現在までの時間的連続性のある感謝を測定する尺度としての妥当性を支持すると考えられ、本尺度を用いて仮説モデルを検討する。

2. 成人期・中年期を対象とした仮説モデルの検討

他者に支えられ困難を乗り越えてきたという過去展望の感謝が、成人期・中年期の時間的態度に及ぼす影響を検討するという本研究の目的に沿って老年期を除く、64歳までの140名のデータ（男性69名・女性71名・平均年齢 46.7 ± 10.1 歳）を抽出し、大学生のGPSと時間的展望の関連モデル（Figure 1）を参考に共分散構造分析を実施することとした。

1) 各変数の記述統計量と相関

共分散構造分析を実施する前に、各変数の関連を調べるためPearsonの相関分析を行った。その結果、GPS13合計値及びGPS13下位因子はGQ-6と有意な正の相関（ $r = .49 \sim .53, p < .01$ ）が示された。また、GPS13合計値及びGPS13下位因子及びETPS下位項目「過去受容」には有意な正の相関が示されなかったが、GQ-6はETPSの下位項目全てに有意な正の相関（ $r = .27 \sim .55, p < .01$ ）が示された（Table 3）。

2) GPS13合計値・GPS13下位因子における仮説モデルの検討

大学生を対象とした分析（下満・小山, 2021）では、GPS合計値を用いたが、今回は因子分析で示唆された下位因子の特徴を踏まえて仮説モデルを検証した。

第1因子「率直な交流と寛容への感謝」は互いに意見し合っても寛容に受け止められたと感じる体験であり、信頼感に基づく交流と考えられる。そのような関係性を基盤として、第2因子「存在の受容への感謝」のように困難に圧倒された自分の傍に居てくれたことが想起されると考え、第1因子から第2因子のパスを想定した。

仮説モデルを参考にブートストラップ法を用いて適合度が良くなるまで探索的に分析を繰り返した。なお、ETPSに関しては、現在における各時制への評価である

Table 2 GPS13の併存的妥当性（N=200）

| | GPS13 合計 | GPS13 率直 寛容 | GPS13 存在 | TC PP | GQ-6 合計 |
|------------------------|------------------|-------------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| GPS13合計値 | — | .97** | .93** | .33** | .44** |
| GPS13：率直な交流と寛容への感謝 | | — | .83** | .45** | .40** |
| GPS13：存在の受容への感謝 | | | — | .45** | .41** |
| TCPP：時間的連続性「過去と現在の連続性」 | | | | — | .69** |
| Mean (SD) | 67.71 (24.23) | 19.30 (7.21) | 13.50 (5.41) | 34.71 (8.29) | 22.46 (6.29) |

** $p < .01$ 有意な正の相関に網掛けをしている

Table 3 全変数の記述統計量および相関係数 (N=140)

| | GPS13 合計 | GPS13 率直 寛容 | GPS13 存在 | GQ-6 | TCPP | 目標 指向 | 希望 | 現在 充実 | 過去 受容 |
|------------------------|------------------|-------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| GPS13合計値 | — | .97** | .94** | .53** | .37** | .32** | .24** | .17* | .01 |
| GPS13：率直な交流と寛容への感謝 | | — | .82** | .49** | .36** | .28** | .23** | .17* | .01 |
| GPS13：存在の受容への感謝 | | | — | .52** | .35** | .34** | .22** | .14 | .01 |
| GQ-6合計値 | | | | — | .57** | .54** | .55** | .46** | .27** |
| TCPP：時間的連続性「過去と現在の連続性」 | | | | | — | .42** | .31** | .29** | .06 |
| 目標指向性 | | | | | | — | .72** | .54** | .31** |
| 希望 | | | | | | | — | .74** | .42** |
| 現在充実 | | | | | | | | — | .47** |
| Mean (SD) | 34.07 (11.86) | 20.19 (7.05) | 13.89 (5.37) | 22.26 (6.58) | 14.91 (3.77) | 15.55 (4.03) | 11.91 (3.56) | 15.52 (4.02) | 12.26 (3.34) |

* $p < .05$ ** $p < .01$ 有意な正の相関に網掛けをしている

という点から、誤差変数の相関を仮定して分析した。
なお誤差変数間の相関のパスはFigureにおいては省略した。

その結果、適合度も充分であった (Figure 2: CMIN: $\chi^2(21)=7.010$, $p=.428$, GFI=.986, AGFI=.943, CFI=1.000, RMSEA=.003, AIC=49.010)。従って、今後の分析及び考察はFigure 2を基に進める。

このモデルでは、GPS13「存在の受容への感謝」はGQ-6とETPS「目標志向性」に対し直接的に有意な正の影響を与えていた。またGQ-6はETPS下位項目全てに対して有意な正の影響を与えていることが示された。GQ-6がETPSに与える影響は、Figure 1に示されるものよりも強いものであった。一方、GPS13「率直な交流と寛容への感謝」からETPS「過去受容」へのパスは有

意ではなかった。

3) 子育て経験による影響力の相違

Figure 2のモデルを用いて、子育て経験について「現在子育て中（以下、子育て群）」(N=44, 平均年齢42.1±7.5歳)「かつて子育て経験あり（以下、完了群）」(N=38, 平均年齢56.7±5.5歳)「子育て経験なし（以下、未経験群）」(N=58, 平均年齢43.8±9.7歳)の3群に分けて多母集団同時分析を行った。その結果、適合度は充分であった (Figure 3: CMIN: $\chi^2(21)=26.465$, $p=.189$, GFI=.952, AGFI=.807, CFI=.989, RMSEA=.044, AIC=152.465)。

子育て群においてのみ、GPS13「率直な交流と寛容への感謝」からETPS「過去受容」へ有意な負の影響

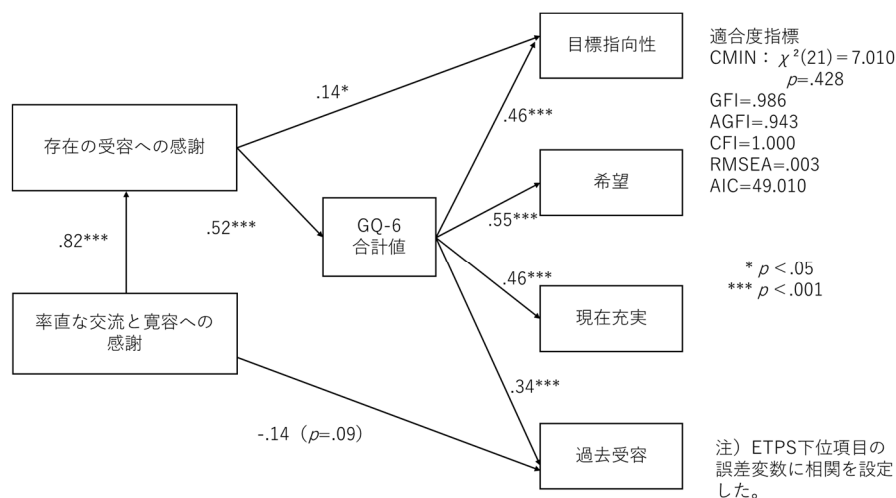


Figure 2 成人期（中年期まで）の解析結果

困難克服過程で受けた支えに対する感謝が成人期以降の時間的展望に及ぼす影響

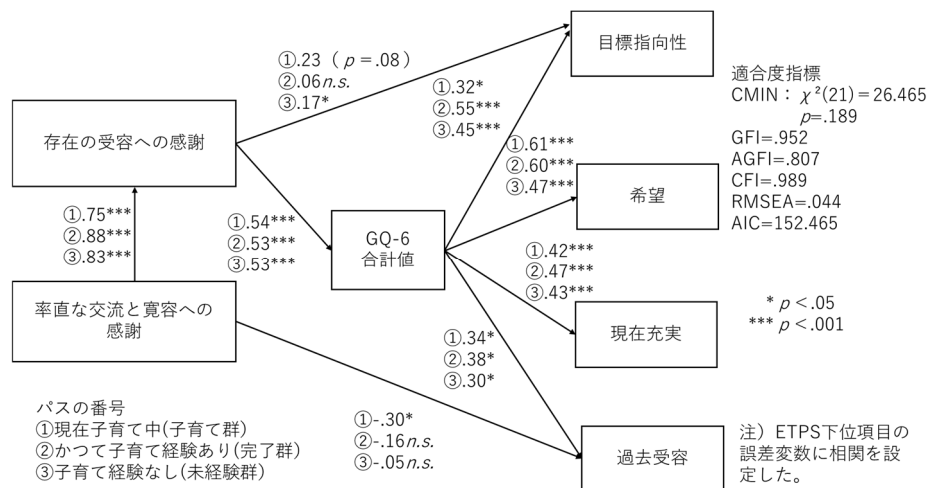


Figure 3 子育て経験に基づく多母集団同時分析

Table 4 標準化間接効果 (N=140)

| | 率直な交流と寛容への感謝 | | | 存在の受容への感謝 | | |
|---------|--------------|---------|---------|-----------|---------|---------|
| | 子育て群 | 完了群 | 未経験群 | 子育て群 | 完了群 | 未経験群 |
| GQ-6合計値 | .44*** | .43*** | .45*** | — | — | — |
| 95%CI | .28-.59 | .29-.56 | .27-.60 | — | — | — |
| 過去受容 | .13* | .13** | .16** | .15** | .17** | .19** |
| 95%CI | .04-.25 | .04-.26 | .05-.30 | .05-.29 | .05-.32 | .06-.35 |
| 現在の充実感 | .19*** | .19*** | .21*** | .22*** | .24*** | .25*** |
| 95%CI | .09-.32 | .10-.30 | .12-.30 | .11-.35 | .13-.37 | .13-.36 |
| 希望 | .23*** | .25*** | .23*** | .27*** | .32*** | .28*** |
| 95%CI | .12-.37 | .14-.37 | .13-.33 | .15-.40 | .18-.45 | .15-.40 |
| 目標志向性 | .33*** | .34*** | .33*** | .23*** | .26*** | .23*** |
| 95%CI | .19-.48 | .22-.47 | .21-.45 | .10-.36 | .14-.38 | .11-.37 |

** $p < .01$

*** $p < .005$

($\beta = -.30$, $p < .05$) が示された。そして、未経験群と子育て群において、GPS13「存在の受容への感謝」からETPS「目標志向性」へ有意または有意傾向の正の影響が示された(未経験群: $\beta = .17$, $p < .05$, 子育て群: $\beta = .23$, $p < .10$)。

さらに標準間接効果の検討を行った結果、GPS13「率直な交流と寛容への感謝」、「存在の受容への感謝」のいずれも、3群においてすべての標準化間接効果が有意であり、正の影響であることが示された (Table 4)。子育て群において、GPS13「率直な交流と寛容への感謝」からETPS「過去受容」へ有意な負の影響($\beta = -.30$, $p < .05$) が示されたことを上述したが、GPS13「率直な交流と寛容への感謝」も「存在の受容への感謝」やGQ-6を媒介することによってETPS下位項目全てに対し正の影響を及ぼすことが示された。

考察

1. 作成尺度における青年期と成人期の比較検討

GPS24項目(下満・小山, 2021)を用い、成人期を対象に再度因子分析を行った結果、「率直な交流と寛容への感謝」と「存在の受容への感謝」という2因子13項目となり、信頼性と妥当性が確認された (Table 1・Table 2)。

因子間相関の高さからも示されるように、GPS13両因子共に他者からの被援助経験を示す項目からなるという共通点はあるものの、関係の質を踏まえると両因子の感謝体験は異なると考えられる。なぜなら、第1因子「率直な交流と寛容への感謝」は、困難な状況下に置かれた自分を理解して欲しいという気持ちから生じた衝突や批判といったアグレッシブな態度も含まれている。また、相手からも単に受容されるという一方

向的な関わりだけではなく、率直に意見を交わすという相互交流が窺われる。他方、第2因子「存在の受容への感謝」では、困難な状況に圧倒され開示抵抗を感じている状態から、主体性を取り戻すまで他者が待ってくれる、あるいは現状をありのまま受け入れてくれたという、受動的な関わりであると考えられるからである。

他方、大学生を対象としたGPS（下満・小山，2021）は他者の肯定的な関わりを実感しやすい項目が集約した「他者からの受容に対する感謝」と、否定的思考や感情と距離を取り新たな気づきを得たことへの感謝である「新たに気づいた支えに対する感謝」の2因子構造であった。そして、両因子共にETPS「過去受容」と正の相関が示されていた。

成人・青年期版尺度のそれぞれの因子構造を比較すると、大学生は援助者の関わりを自身がどのように受け止めたかという、自己視点を中心とした振り返りがなされ、被援助経験を肯定的に評価していると考えられる。対して、成人期の対象者は、大野（2020）が述べた「世代継承性」への変遷過程において、支えられるという受動的な体験に加え、支えるという能動的な体験の機会も得やすいと考えられる。従って、当時の被援助経験を援助者側の心情や関わりも含めて意識化しやすく、関係の質の違いが反映された分類となったと考えられる。

2. 成人期を対象とした仮説モデルの検討

成人期を対象としたモデルは、大学生を対象としたFigure 1と概ね同じモデルとなり、適合度も概ね改善された。そして、時間的展望への影響力は大学生よりも大きかった（Figure 2）。

このことから、成人期においても、当時の困難状況での被援助経験を振り返って感謝することが、感謝特性を高め、過去から未来にかけて肯定的な評価をもたらすと考えられる。

GQ-6の質問項目は、世の中、人生、不特定多数の他者を対象とした全般的な感謝を測定しており、現在における環境や時間との繋がりを感じている状態像と考えられる。従って、GPS13がGQ-6を介しETPSへ至る一連の流れは、過去を現在の精神的健康に活かし（日潟，2007，2012；日潟・岡本，2008）、現在との繋がりを保ちながら未来を展望するという成人期の時間的展望の状態像（白井，1997）を支持する結果と考えられる。

GPS13からGQ-6への影響を見ると、GPS13「存在の

受容への感謝」のみ中程度の正の影響が示された。これより、辛い状況でも自分の存在をありのまま受け入れられたと感じられる体験は、肯定的な時間的態度を持つにあたり特に重要な位置づけであると考えられる。

3. 子育て経験別による影響力の相違

世代継承性への関与の一つとして子育て経験に着目し、子育て経験の有無及び現在の進行状況による相違を検討した（Figure 3）。

GPS13下位因子がETPSに及ぼす間接効果は、未経験群、子育て群、完了群の3群において全て有意であった。つまり、子育て経験の有無に限らず、GPS13はGQ-6を介して時間的態度を高めるというプロセスが示された。

その一方、子育て群のみ、GPS13「率直な交流と寛容への感謝」から「過去受容」へ負の影響が示されており、未経験群と完了群にはそのようなパスは見られなかった。つまりこれは、子育てを経験する上での一過性の特徴である可能性が考えられる。永田（2002）は、成人中期を対象とした面接調査にて、ライフステージごとに重要他者との関係を分析し、必ずしも葛藤経験を通した内在化の作業を経てその関係を自分の人生に位置づけているとは限らず、未整理の場合もあることを明らかにしている。また、肯定的な関係の維持・構築には、ライフサイクルに渡って関係の葛藤に取り組むことや、他者からの影響を意識化することが関係していると述べている。これを踏まえると、子育て群に示された過去への否定的な影響は、子育てを始めたことによって、過去の援助者との関係の見直しに着手し始めたことを示唆していると考えられる。

GPS13「率直な交流と寛容への感謝」の項目には、自分を理解してほしいという欲求から生じたアグレッシブな態度も含まれている。これは吉本（1983）が述べた内観療法の「してもらったこと」でもあり「迷惑をかけたこと」にも重複する体験と考えられる。子育てを始める時期は「育まれてきた子ども」という役割から、親という「育む者」としての新たな役割を体験し始める、いわば移行期である。親としての初めての体験を通して、親の大変さについて身をもって知り、自らが当たり前と思って享受してきた親からの庇護は当時の親の苦労でもあったことを想像し始める時期であろう。さらに子どもの発達に伴い、思春期の第二反抗期への対応、青年期以降の巣立ちなど親子関係は刻々と変化を遂げる。その都度、人は新たに自分が親から受けた恩恵を振り返り、同時に自らが親として苦

労をしていくのであろう。その最中には、親に受けた恩恵だけではなく、それに対する負い目も生じうると考えられる。これが、愛情体験の想起と、受け身で自己中心的な態度に対する負い目の自覚を体験し、自らの親やまたは親の代わりになってくれた人との関係を再構成する（吉本，1983；村瀬，1996）過程であると考えられるのだが、今回の研究において、子育て中の群にのみ、感謝から過去受容に負の影響が出たことは、まさに親との関係性の再構成に伴う一過性の「負い目」の体験過程を反映していると言えるのではないだろうか。

完了群は、GPS13からGQ-6を介して時間的展望に影響を与えるパスに集約しており、子育て群に見られたような過去への否定的評価は示されなかった。子育てを通して次世代にまで対象を広げて関与し続けることで、子育てを終えた頃には、被援助経験に伴う複数の感謝がより一般的な感謝特性を高め、肯定的な時間的態度の形成に寄与すると考えられる。

上述を踏まえ、子育て群と完了群を子育ての進展と仮定するならば、子育てに取り組む中で、親（育む側）の立場から、当時の自分（育まれた側）の関わりを省みて、感謝と負い目を感じ、過去を一時的に受け入れにくく感じる面も生じるが、子育てを終えた頃には、過去の被援助経験という特定の事象に伴う複数の感謝が、より一般的な感謝特性を高め、肯定的な時間的態度を形成していくという変化が生じていると考えられる。このように、子育ての進展は、感謝と時間的展望の関連を変化させる、つまりは、感謝の体験が変容した結果、時間的展望の質的变化を引き起こす可能性が示されたと考えられる。

一方、未経験群でのみ、GPS13「存在の受容への感謝」から「目標指向性」へ有意な正の影響が認められた。つまり、未経験群では、自分の存在をあるがままに受け入れてもらえたという感謝によって、自分の人生における目標を追い求める態度が直接的に高められるという独自の影響が存在すると考えられる。未経験群は、子育て群と対象者の年齢が近く、また、ライフコースの多様性から未経験群全員が将来的な子育てを希望しているとは考えにくい。そのため、未経験群のみに示された影響は、子育てをする前あるいはそれ以外の要因によって生じうると考えられる。

4. 本研究の限界及び今後の展望

本研究の限界及び今後の展望は以下の3点である。

1点目は測定法・調査法の改善である。今回は横断調

査の結果から子育て中と完了群を子育ての進展と仮定し、過去展望の感謝の中でも被援助経験への感謝が時間的展望に及ぼす影響の変化を考察した。また、未経験群は様々な状態像が想定されるため、子育て前における感謝と時間的展望の関係は十分に明らかにすることができなかった。従って、子育て前から終了後に至るまでの感謝体験の変容を明らかにするため、成人期を対象に長期的な縦断調査を行い、子育てをする前から子育て後までを追跡し、より詳細に検討していく必要がある。また、今回は子育て経験というごく限られた領域に焦点づけており、「世代継承性」の実践領域の多様性を踏まえて感謝と時間的展望の質的变化を本研究から論考することはできず、今後の検討が望まれる。

調査方法について、オンライン調査では、調査協力者が必要な注意資源を割かず回答してしまう傾向があるため（三浦・小林，2016）、内省の程度に個人差があったことは否めない。従って、過去を省みるという作業を行いやすいような工夫や、回答者の動機づけに十分な配慮を行う必要があるだろう。

2点目は、測定変数を明確化し、変数間の影響を詳細に検討することである。竹澤ら（2006）は、成人期は自立し頼られる側としての役割を果たさねばならないという意識が強くなり、頼る側としての視点が見過ごされやすいと述べている。このような心理的負担の可能性を踏まえると、被援助経験への感謝の質は他の発達段階とは異なると推測される。また、GPS13「率直な交流と寛容への感謝」が過去に否定的な評価をもたらした背景要因を、内観療法における感謝と負い目の自覚に伴う進展プロセス（吉本，1983；村瀬，1996）から考察したが、GPS13に含まれる複数の要素を具体化の上、検討することが求められる。

3点目は、調査時期による限界である。本研究はコロナウイルス感染症拡大前に実施されたデータに基づいている。幼い子をもつ母親の精神的健康は、コロナウイルス流行期に悪化傾向にあり、以前からの子育ての不安や困りごと、受援の機会を活用しようとする姿勢の乏しさ、ソーシャルサポートの乏しさが心理的苦痛の関連要因として報告されている（木村ら，2022）。このように、子育てを巡る親の負担は以前より増している現況においては、本研究で示された過去へのネガティブな評価がより強く示される可能性も考えられる。そのため、追試によるモデルの再検証も求められるだろう。

引用文献

- Erikson, E. H. (1959, 1982). *Identity and the Life Cycle*. New York. International Universities Press. (西平直・中島由恵訳 (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- 日潟淳子 (2007). 青年期と中年期のサークルテストによる時間意識の検討 日本青年心理学会大会発表論文集, **15**, 72-73.
- 日潟淳子・岡本祐子 (2008). 中年期の時間的展望と精神的健康の関連: 40歳代, 50歳代, 60歳代の年代別による検討 発達心理学研究, **19**(2), 144-156.
- 日潟淳子 (2012). サークルテストによる中年期の時間的展望の検討 カウンセリング研究, **45**(1), 1-10.
- 池田幸恭 (2006). 青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析 教育心理学研究, **54**, 487-497.
- 池田幸恭 (2014). 成人期を中心とした親に対する感謝の検討 和洋女子大学紀要, **54**, 75-85.
- 石井 僚 (2015). 時間的連続性尺度の作成 青年心理学研究, **27**, 39-47.
- 木村美也子・井手一茂・尾島俊之 (2022). 幼い子をもつ母親のコロナ禍の心理的苦痛とその関連要因: 子の育てにくさ, 発達不安, ソーシャルサポートおよび受援力に焦点をあて 公衆衛生誌, **69**(4), 273-283.
- Lewin, K. (1951). *Field Theory in Social Science*. Harper & Brothers. (猪股佐登留訳 (1961). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 三浦麻子・小林哲郎 (2016). オンライン調査における努力の最小限化 (Satisfice) 傾向の比較: IMC違反率を指標として メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 27-42.
- 村瀬孝雄 (1993). 内観法入門——安らぎと喜びにみちた生活を求めて—— 誠信書房
- 村瀬孝雄 (1996). 内観——理論と文化関連性—— 誠信書房
- 永田彰子 (2002). 関係性から見た生涯発達——アイデンティティを育てる土壌としての「関係性」—— 岡本祐子編著 アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房 pp.121-147.
- 大野 久 (2020). アイデンティティ概念再考 教職研究, **34**, 3-15.
- 下満由貴・小山憲一郎 (2021). 困難克服過程で受けた支えに対する感謝が大学生の時間的展望に及ぼす影響 福岡県立大学人間社会学部紀要, **29**(2), 1-17.
- 白井利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学, 勁草書房
- 白井利明 (2010). 人生はどのように立ち上がるのか——「予期せぬ出来事」に着目して—— 心理科学, **31**(1), 41-57.
- 白木優馬・五十嵐祐 (2014). 感謝特性尺度邦訳版の信頼性および妥当性の検討 対人社会心理学研究, (14), 27-33.
- 高井範子 (2001). 他者からの受容感と生き方態度に関する研究: 存在受容感尺度による検討 大阪大学教育学年報, **6**, 245-254.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2006). 適応的な依存とは?: 依存概念の再検討 筑波大学心理学研究, **31**, 73-86.
- 都筑 学 (2007). 時間的展望研究へのいざない 都筑学・白井利明編著 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版 pp.1-10.
- 鷺巣奈保子・内藤俊史・原田真有 (2016). 感謝, 心理的負債感が対人的志向性および心理的well-beingに与える影響 感情心理学研究, **24**(1), 1-11.
- 吉本伊信 (1983). 内観への招待——愛情の再発見と自己洞察のすすめ—— 朱鷺書房
- 吉野優香・相川 充 (2018). 被援助場面で経験される感謝感情と負債感情の生起過程モデルの検討 心理学研究, **88**(6), 535-545.